

高井有二

青梅

おうめ

青梅

おうめ

高井有一

集英社

青 梅 — おうめ —

定価 八八〇円

一九八〇年二月二五日 第一刷印刷
一九八〇年三月一〇日 第一刷発行

著 者 高井有一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
二三〇一六三六一 (出版部)
電話 二三八一二七八一 (販売部)

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止。落丁乱丁本はお取り替えます。
0093-772248-3041
© Y. Takai, Printed in Japan, 1980

高井有一*青梅*目次

山頂まで

7

墓地の焚火

35

厩橋

59

青梅

83

夭折

105

戦争画集

129

和やかな忌日

151

波間

175

装画
文承
丁 根
菊地信義

青

梅

山
頂
ま
で

窓際の闇のなかに、煙草の火の赤い粒が浮いてゐた。人が身動きする気配とともに、その赤さが増し、ほつと短い吐息が聞えた。

「眠れないのか」

と私は声をかけた。宵に飲んだ酒がまだ少し遺つてゐるのが判る。

「寝たよ、充分に」

穏やかな声が返つて来た。

「もう、朝だよ」

部屋の空気が微かに動いてゐた。窓が細く明けてあるのだらう。寝たままで見廻すと、障子は蒼味を帯び、床の間に二つ並んで置いた鞆の色合ひも、うつすらとだが見えて、確かにもう

朝が来てゐた。

「天気はどうかかな」

と私も起きて、窓際の椅子に、彼と向ひ合つて坐つた。

「喫むか」

彼が煙草の箱を投げて寄越した。私たちはしばらく黙つて煙草を喫ひ、明けかけた戸外を眺めた。宿は町外れの丘の上にあり、眼の下のささやかな町の家並と、黄ばみかけた田の拡がりの向うに、低い山の連なりがあつた。天気は悪かつた。黝ずんだ灰色の雲が山の稜線にまでかぶさり、朝の明るみは、その雲の薄い部分から、僅かに滲み出してゐるに過ぎなかつた。

「いつも、朝は早いのか」

煙草を押し潰して、私は訊いた。荒れた舌に煙草は苦かつた。

「早いね。まあ、これ程ぢやないが」

彼は膝を抱へ、仰向いて、首を緩やかに廻した。そんな年寄染みた仕種の似合ふ年齢に互ひになつてゐるのだ、と私は思つた。

私たちは、大学のころの同級会をやるために、この温泉町に来たのである。同級会と言つても、名簿を作つて通知を出す正式のものではなく、消息の判つてゐる者が、順繰りに連絡をつけて行つて、やうやく十二人が集つたのであつた。宿に着いて先づ風呂を浴び、宴会では近況

を報告し合ひ、芸者を入れて歌をうたつた。そしてそのあとは町へ下りて、射的をし、屋台の蕎麦を食べたりした。すべて型通りに運ばれただけの事だが、その型通りの成行きを、誰もが愉しんでゐた。それが、大学を卒へて二十四年も経つた私たちにふさはしいやり方だつたからであらう。

宴会のとき、彼はビールのほかは飲まなかつた。傍から薦められれば、殆ど一と息にコップを乾すが、人には注いでやらす、手酌で飲みもしなかつた。歌の番が廻つて来ると、やや高いが柔かみのある声で朝鮮の民謡を歌ひ、座が乱れ始めてからも、ずっと自分の膳の前を動かずに坐つてゐた。艶のある髪を大きく波打たせてゐるところは、昔と變りがない。その髪の量の多さと黒さとは、みんなのやつかみを交へた揶揄の種となつた。

私が彼と相部屋になつたのは、幹事役の男の部屋割に従つたまでだが、私はその偶然を歎んだ。

「久し振りだな、ずいぶん」

牀へ入り際に私は言つてみたが、彼はそれを極く当り前の意味でしか受取らなかつたかも知れない。彼はただ、

「いいか」

と私に念を押して枕許の明りを消し、たちまち寢息を立てた。私が眠るまでには少しの間が

あり、私は注意深く彼の寝息を聞いてゐたやうな気がする。

学生のところ、彼はダブル・ベッドに寝てゐた。昭和初年に建つたといふ外壁に蔦を這はせた木造洋館の、二階の部屋を彼は占有してゐた。そこに立籠つてゐた、と言つた方が適切かも知れない。部屋へ出入りする度に、彼は頑丈な檜材の扉にいち鍵をかけた。両親でさへ彼と話さうとすれば、跳躍する豹を型どつた青銅製のノッカーを敲き、扉の外から用向きを伝へなくてはならなかつた。例へばノッカーが二つ敲かれれば、母親が来た合図なのである。

「目黒の伯父さんがお見えだよ。御挨拶においで」

彼の母の声は低く、聞取り難い。

「後にしてよ」

と彼は素気なく返事をするが、母はもう言ひ返さない。そんな遣取りを、私ははらはらして聞いてゐた憶えがある。

ベッドは、戸口を入つて正面の壁に沿つて置かれてゐて、それは殆ど真四角に見えた。上に拵げた分厚い卵色の毛布には、いつも皺がなかつた。ベッドの足許のカーテンの蔭には、小さな水屋があり、茶くらみはそこで淹れられる。水屋の流しの赤銅が磨かれて鈍い艶を帯びてゐた。

三月に入つたばかりの日だつたと思ふが、夕方になつて雪が降り始めた。雪の粒は細かく、

初めは垂れこめた雲の間から湧き出すやうに舞ひ漂つてゐたが、間もなく窓からの視野をすっかり鎖すほどに激しくなり、周囲の住宅街の物音が絶えた。小熄みになるまで、と口実を設けて、いつものやうに話し込んでゐた私は、暮れ果ててからやうやく腰を上げたが、彼に送られて私鉄の駅へ行つてみると、改札口の柵にまで雪が積もり、電車はすでに止つてゐた。

「泊れよ」

開通の見込みは立たない、と乱暴に殴り書きをした掲示にちらと眼をやつて、彼は言つた。私たちは再び、靴の下に雪が軋みを立てる道を引返した。彼の家へ曲る角に、まだ新しい自転車、半ば雪に埋もれて打ち棄てられてゐた。

私は、彼の母が運んで呉れた夕食を御馳走になり、あとは彼の父が大事にしてゐるといふウイスキーを少しづつ飲んで、夜の時を過した。石油ストーヴが燠かく、濡れそぼつた窓の硝子に、門灯の光が淡く滲んで映つてゐた。

「女が殺された時刻には、雪はもう熄んでゐたんだがね、その離れ家の周りには一つも足跡がないんだ。それなら女は自殺したのかと言へば、後頭部に弾を撃ち込まれてゐるんだから、そんな事は有り得ない」

彼がたまたまこの間読んだ探偵小説の話である。家具製造の会社を経営する彼の父は、古くからの探偵小説の愛好家で、父の書齋には、和洋取り混せて数百冊もの探偵小説があるさうで

あつた。そして最近は、そのうちかなりの数が、彼の部屋に移動して来てゐた。

「どうだ、見当つくかい、この密室のからくり」

かう訊かれて、私が何と答へたか、もう憶えてはゐない。私はその小説を借りて歸つて読んだ筈であるが、筋立てはむろん、題名すら憶えてゐない。

十一時を過ぎて、彼は、

「寝ようか」

とベッドの毛布をまくり上げた。純白の敷布を敷いたほぼ中央に、細かい緑の縦縞のバジマが畳んで置いてあつた。彼は私にも、似通つた柄のネルのバジマを貸して呉れた。

「朝はおふくろが七時半に起しに来るよ。少し早いけど、いいな」

分厚い毛布の内側は、直ぐに二人の体温がこもつて暖かくなつたが、私は寝付けなかつた。

一晩中点け放しだといふストーヴの火の明るみが、眼にちらついたせゐばかりではない。私は、いつも自分が寝る部屋の事を考へてゐた。終戦の年の春先の空襲で家を焼かれた私の家族は、それから六年経つてもまだ、親戚の家に間借りをする生活から脱け出せなかつた。八畳一間に、両親と私が並んで寝るのである。教員の父が遅くまで仕事をする夜には、母と私も眠れず、遅くまで起きてゐなければならなかつた。ほんの些細な行違ひから起りがちな氣拙さを避けようと、私たちは一緒にゐても顔を背けるやうに、黙り込んでゐる時が多かつた。私は自然に凶